

2019年度Aセメスター報告書

教養学部4年 柴田卓巳

これまでに多くの方が報告書を書いており、普通のことを書いてもただかぶってしまうだけなので、余り他の方が書いていない話題を出来るだけ多く盛り込むようにしました。基本的な事項に関しては、2019年度Sセメスターの羽田野君の報告書 (http://campus-asia.c.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2019/09/2019Peking_Hadano-1.pdf) に非常に分かり易く書かれており、痒いところにも手が届きますので、一度ご覧になることをお勧めします。

I 留学開始前

Sセメスターではソウル大学に留学し、Aセメスターでは北京大学に留学することとなった。初修外国語(第二外国語)は韓国朝鮮語であり、1年間ソウル大学に行くという選択肢もあったが、別に韓国・朝鮮をメインに研究するつもりというわけではなく、またソウル大学へは大学のプログラムで何度も行っていたことがあり、1年間だと後半は確実に飽きってしまうに違いないので、それよりは韓国と中国の両方を少しずつ理解出来るようになりたい、中国(延いては中華圏)でも今後調査・研究が出来るように準備をしたいということで、半年ソウル大学、半年北京大学という道を選んだ。キャンパス・アジアの短期プログラムで中国の学生(北京大生)と接したことがあり、彼らのことも知りたいと思い続けていたことも、北京大学に行ってみようと思った理由の1つである。

とはいえ、北京大学に行きたいなら行けるというそんな簡単な話ではなかった。北京大学への留学は人気があり、また北京大学の年度は9月から始まることから、Aセメスターから留学を開始したい学生が多く、倍率が高いことは予想されていた。そのため、どのようなところから来ている人が応募しているのか、応募後知り合いを通じて情報を探していたのだが、英語がペラペラな上に中国語を他の学生より集中して学習しているTLP中国語の人が多く応募したと聞いて、英語は大して上手くない上に中国語も覚束ない私は一体選考を通過出来るのだろうか、日々ソウルで肩を落としていた。選考に落ちたら、ソウル大学で2学期目を過ごすか、或いは東京大学に戻るか(前者の場合、飽きが来るというだけで別に良いと言えば良いのだが、後者の場合、再度一人暮らしのための家を探す羽目になり、また東大に戻った上で留年すると東京大学に在籍している期間が長くなるせいで授業料免除等の申請が出来なくなるため、大きな金銭的負担が発生する)の選択をしなければならなくなる。そのため、4月上旬に面接が行われるまでに何としてでも中国語能力を上げておき、選考に通らなければならないという焦りに駆られ、ソウル大学での留学が始まった3月中、空き時間は常に中国語の勉強をしていた。HSK4級レベルの復習から始める程度だったので、悪足掻きみたいなものだったが、一緒にソウル大学に留学していた

方々が手伝ってくださったこともあり、多少は安心して面接に臨めた。ちなみに、ソウルに居たため、Skype での面接だった。付け焼刃だったため中国語での受け答えに少し失敗してしまい、選考に通るか自信は無かったのだが、有り難いことに拾ってくださり、北京大学へ行くことが決まった。英語と中国語に関しては TLP 中国語の学生に比べて圧倒的に不足していたので、志望理由で若干点が良かったのかもしれない。

II 留学中

・留学生活について

初めての中国だったことから、例えば、どこに何が在るのか、何に乗れば良いのか、店に入ったらどうしたらいいのか、というような実践的な知識が全く無かったのだが、TLP 中国語の学生が最初から最後まで私を助けてくださった。ソウル大学に留学した後は、S セメスターの報告書にも書いた通り「(良い意味で) 思っていたよりも留学って簡単」という感想を抱いていたのだが、中国に来てすぐに「留学ってこんなに辛いのか……」と思うようになった。今考えると、一番大きかったのは語学力の問題、次いで慣れの問題だったので、留学が終わる頃にはどちらも大体解決し、やっと留学生生活を享受出来るくらいの心持ちにはなっていたが、最初は大変だった。

全く慣れていない状態で留学生生活を開始したので、ソウル大学に居たときよりもかなり積極的に動いたと思うし、また動かざるを得なかった。また、選考に漏れた方が居るのに北京大学でちゃんと学んで帰ってこなければ申し訳が無いという思いも、出来る限り北京大学で努力し収穫を得ようという原動力になった。

例えばソウル大学に居たときには、韓国語が或る程度出来ていてどこへ行くのも 1 人で不自由せず、また知り合いも多数居たので、積極的に交友関係を広めようとはしなかった。しかし北京大学では、例えばラングエージパートナーを見つけて定期的に会い、会話をしたり映画を観に行ったりしにいったこともあったし、北京大学で入った元火動漫画社や中日交流協会¹ (どちらも北京大学の学生団体) のイベントには、予定が付く限り出来るだけ参加し、北京大生と積極的に交流した。また特に留学を開始した頃は、恥ずかしなが

¹ 日本に興味のある北京大生と、そうした学生と交流したい日本人(留学生)を主とする「中日交流協会」という団体では、1~2ヶ月に1回ほど、一緒にゲームをしたり遠足に行ったりというような自由参加のイベントが開催され、またラングエージパートナーとのマッチングもここでっており、実際に私はそこで見付けることが出来た。東京大学の国際交流系のサークルは、国際的な問題について議論をするようなものばかりな印象があるのだが、交流はしたいが別に議論したいわけではない私のような学生でも入れる、「中日交流協会」のようなのんびり交流する団体があれば良いのにと考えた(但しそういうことに興味のある東大生はいずれにせよ多くなさそう)。

ら中国語能力が不足しており、課題や持ち物等の情報を聞き取れないこともあった。そうした場合には、同じ授業を受けている見ず知らずの北京大生を捕まえて WeChat を交換した。

ソウル大学留学中も、韓国語と並行して中国語の勉強も進め、北京大学留学までに何とか中国語能力を向上させようと努力していたが、間に合わなかった。留学が始まった頃には、中国語で話し掛ける際、上手く喋れるか、相手の言うことを聞き取れるか自信が無く、毎回緊張していたことを良く覚えている。生活や授業の中で不便を来しており、中国語能力が不足していることは明らかだったので、留学中も最初から最後まで中国語を勉強し続けた。空き時間の大半は中国語の勉強に充てることとなった。その甲斐あって、留学期間の半分を終えた頃には、ようやく会話を話し掛ける際の緊張も解け、留学期間の最後の方では慣れたという実感をやっと得られたのだが、そこまで来て留学が終わってしまったのが残念である。

・留年することによる問題

4年生でソウル大学と北京大学に留学し、卒業論文を書かなかつたため、留年することとなった。お金に余裕のある皆様には関係の無い話だが、お金に余裕が無く奨学金や授業料免除に申請をして生き延びている者にとっては、標準修業年限を超えると色々面倒なことになる。ひょっとすると気になる方も居ると思うので、私の経験を記しておく。

奨学金は支給している団体によって制度が異なるので、自分で良く確認していただきたいのだが、私の場合は、留学期間中は派遣先のソウル大学・北京大学から奨学金が出るため財団からの奨学金は停止、帰国した次の月（2月）から支給再開となったものの、支給期間は標準修業年限までということで、3月で終了。2回目の4年生からは支給されないこととなった。大学のプログラムで留学しているし、留学成果や報告書とかいうものも求められたので、留学中支給停止になっていた分を留学終了後に頂けるものだとばかり思い込んでいたのだが、ただ単にその期間支給されるはず（前述のとおり留学先から奨学金が出ているので支給はされないのだが）だった奨学金を放棄しただけとなった。何で奨学金が支給されてもいないのに留学成果や報告書を書かないといけないのか。

授業料免除申請については、留学していた期間を月単位で在籍期間から除いた上で、4月・10月時点で48ヶ月に達していなければ申請出来るらしい。（まだ申請していないのでどうなるかは不明）。三鷹寮も、本当は標準修業年限を超えると入居申請は出来ないのだが、大学の留学プログラムに参加したことによる留年なので、特別理由書を別に書くことで入居申請が可能である。

いずれにせよ、アドミニストレーション棟の各担当窓口では親身になって相談に乗ってくださるので、留年して上記のような問題が発生しそうで困っている方、留学するか否か迷っている方は、取り敢えず尋ねてみるのが良い。それにしても、標準修業年限ってそんなに偉いんですかね。

III 今後

・地理学関連

今後調査したい題目の1つとして「日本と韓国の交通体系の違い」があり、中国での交通体系を学んだ上で日韓のみならず中国とも比較出来ないか、ということ留学前の検討課題として挙げていたのだが、中国の交通体系が日韓とは余りにも懸け離れていて、単純な比較は困難であった。簡単に言えば、日本も韓国も鉄道が近距離輸送にも利用されているという点で一致しているのだが、中国の鉄道は近距離輸送を担う交通手段ではなく、隣接する駅間の距離や停車駅間の距離が数十 km というのが普通で、また都市内の鉄道と都市間の鉄道（国鉄）がほとんど別物であるという点で、日韓との違いが著しい（一方でアメリカに近い？）。そのため、この題目に中国を含めるのは困難で、また別の取り上げ方が必要となる。但し、台湾に限っては日韓と似たような交通体系のようであり、比較対象として含められる気がするのだが、生憎台湾へは行ったことが無いので、今後実際に行って検討する必要がある。

また「日中韓地理学会」、ひいてはより国際的な学会で活躍する準備をするというのも留学の目標の1つであった。日本に留学したことのある北京大学の先生で、地理学を学んでいる日中韓の学生の交流に携わっている方にお会いし、話を伺うことが出来たという点では目標を達成出来たのだが、他の学生や先生とはほとんど交流する機会を持てなかったのが残念である。勿論、北京大学で地理学関係の授業を受けたことで、日本と中国における地理学の違いや、日本ではなぜこういう検討をしていないのかというような疑問点を確認することが出来たという収穫もあった。この点に関しては、まずは持ち帰ってきた書籍を読んだ上で、更に検討をしたい。

・留学生に対する接し方

中国に慣れていなかったこともあり、ソウル大学に居たとき以上に、留学生には、現地の学生では感じられないような問題や不安な点が多くあることに気が付いた。留学前は、留学自体や、留学しに来ている学生について良く知らず無関心でもあり、もし留学せずに東京大学に居たままでは、東京大学や日本に来ている留学生の気持ちに気付けなかっただろう。またソウル大学と北京大学における、宿舎や留学生が関わる団体、現地の学生（団体）の留学生との関わり方を見る中で、留学生の立場として良い点・悪い点を認識することができた。留学生が日本に来てやりたいことはそれぞれ少しずつ違うだろうし、どれだけ日本の学生と関わりたいかという点も異なるので、距離感を掴むのは留学生側にとっても受入国側の学生にとっても非常に難しいことだが、その点を認識した上で、自分の所属している学科なり団体なりに留学生がやってきた際に、留学生の希望を叶える手助けをしつつ、摩擦を減らす役目を果たしていきたい。

今後は三鷹国際学生宿舎で生活することになるが、そこには嘗ての私と同じ立場である留学生が多く生活している。数や程度の差はあれ、生活する中で間違いなく不安な点や問題点が生じるし、何より異国の地でそのような悩みを抱えるのは非常にストレスになることであり、留学生活に影響を及ぼし得る。ソウル大学・北京大学での留学生活を活かし、留学生の抱える不安な点や問題点の解決の手伝い、また積極的に交流することによって、留学生が充実した生活を送れるよう手助けをしたい。特に、キャンパス・アジアプログラムで教養学部留学する学生は三鷹国際学生宿舎に居住しているようなので、すぐ近くに居て必要なときに呼んでもらえるという点で、一層役に立てると思う。